

## ジェンダーギャップに思う

荒野詰也

過去の経歴から考えて、中・高校一貫校では女生徒の比率は、一割以下だったし、大学での専攻は、機械工学で同期には女性はいなかった。そして、入社後の製造業で遡ること三十年前の在籍時には、従業員約三千人の工場には係長以上の女性管理職はいなかった。従って、ジェンダーギャップの①などは、考えてもみなかった。

独立後は、中小企業や海外企業の支援業務を行っていた。海外関連の業務も、エアコン等で、輸出先は中近東サウジアラビア方面が多かった。これらイスラム圏の国には女性は就業・車の運転は許されず、ラジオやテレビ等にも女性は登場しなかった。②の③以前であった。

この②の問題に、意識転換を迫られることが起こった。

それは、数年前あるが、アセアン(東南アジア諸国連合)が毎年参加国を順番に巡って開催するアセアン諸国連合技術会議の技術発表に招待され発表したことからである。この大会は、多様な技術部門が参加する規模の大きい行事である。そして会場でアセアン諸国の発表を聴いていて驚いたのは、なんと発表者の七十パーセントが、女性であった。参加した部門のみならず他会場の発表者も、同様であった。

帰国後、遅まきながら、②の問題に関心を持ち始めた。そして、世界経済フォーラムが公開している世界各国の②の③指数を調査するようになった。これの二〇二一年版の日本の順位が、世界一五六ヶ国中一二〇位で、公開が開始された二〇〇六年以降ずっと順位を下げ続けているようである。

今回行われたるオリンピックは、多様性を目指して国際的ルールで運営されており、日本人の活躍ぶりにも、偏りはみられないが、直前の東京五輪組織委員会委員長の、女性蔑視発言が問題化している現状でもある。一方、今年の国家公務員の女性合格率が三十九%と過去最高値を記録したという朗報もある。最近のコロナ禍でのリモートワーク化等の働き方改革が進行し、②の③の改善に繋がることも期待される。